



～山口先生（美術）授業参観～

山口先生の授業参観（3－1）を行いました。

単元は「抽象画（テーマは季節）」、内容は何種類かある色紙を自由にきり、自分で決めた色の台紙に貼り付けていく授業内容でした。

例えば、夏を表現するためにひまわりを形取った色紙を貼ることが具体とするなら、抽象画とは真逆で具体性を持たないようにして夏を表現していくというものです。

授業中、試行錯誤する生徒もいれば、切ってすぐに貼り付ける生徒もいました。

今回の授業では山口先生は「色の配置で大きく決まる」と授業中に何度も指導していました。

実際、今回の授業を通して生徒に身につけさせる力は「ものを見た時に、そこに存在（配置）する色が受け手に対してどのようなイメージ（印象）を与えるか捉える力」

また「（自分が思う）イメージ（印象やテーマ）を相手に伝えるためにはどこにどの色を配置する必要があるか考える力」でした。

「抽象から具体」はよくある形ですが「具体から抽象」に逆の変換をさせる思考の活動は面白かったです。

～山口先生の想い～

授業後の教科会では、作品と評価について話題にあがりました。

（臼杵の意見）

作品を完成させた後、めあてを達成できたかどうか、作品がどうだったかをふりかえりや評価のために「評価基準」を明確にしたほうがいいのではないかな？

（山口先生の意見）

評価基準を明確にすると、その評価を満たそうとして自己表現のある作品や自分の殻をやぶった面白い作品は生まれない。見飽きてしまう作品が生まれる。でも、有名な作品は何度見てもさまざまな視点が生まれ、見飽きない。そういった作品を生徒たちにも生み出してほしい。

～評価か創作か～

生徒の学力や学校生活をみとるものとして「評価」というのは必要不可欠。ただ、授業をする上で「評価をするために、創作を単元に取り入れよう」と考えるか「力をつけるために創作を取り入れ、ついでに評価もしようと思うか」どちらかの考え方で、単元計画を作るかは大きく変わります。

とある中学校で「パフォーマンス課題を研究テーマにしたが、なかなかうまくいかない」という悩みがありました。その時の指導助言の先生は「教師が評価のためのパフォーマンス課題だと思っているとそれは生徒にも伝わります。何のためのパフォーマンス評価かを考える必要がある」と話していました。

私も授業で創作をさせることが多いですが、「この提出物では、ここまでやったらAで～」と説明はしていましたが、「これができるようになったら～の力がついて」という何のためにしているのか、これができることが何に繋がっているのか、という説明は生徒にはしていませんでした。

もちろん、評価する場合は基準を明確にすることは大切です。ただ、その前にそもそもなぜこの活動を取り入れているのか、生徒にどんな力を身につけさせたいのかを説明することも、大切だと山口先生の授業を通して、気づかされました。ありがとうございました。